

ひょうごの福祉

つながりで笑顔輝く 共生のまちづくり

特集

阪神・淡路大震災
から30年
～災害ボランティア活動の
歩みとこれから～

年頭所感

笑顔輝く 共生のまちづくり
あなたのまちの福祉活動
キラリ★社会福祉法人
県社協TOPICS

西宮神社は
福の神「えびす様」の
総本社として
知られる神社です
(西宮市)

手軽に読める
「ひょうごの福祉」
WEBサイト



ふくみ
福美ちゃん

ひょうた
兵太くん

ふくさん

2025
1-2

No.857

この機関紙は赤い羽根共同募金
配分金により発行しています。

「ほっとかへん」を合い言葉にすすめる
共生のまちづくり

兵庫県社会福祉協議会 会長

入江武信



新年あけましておめでとうございます。県民の皆さまにおかれましては、日ごろから地域福祉の推進にご尽力を賜り、心より感謝申し上げます。

昨年は「能登半島地震」が発生し、石川県能登地方を中心に甚大な被害が生じました。被災地を支えるため、兵庫県からも多くの福祉関係者が現地に向き、災害ボランティアセンターや福祉避難所の運営支援などに尽力されました。折しも今年、阪神・淡路大震災から30年を迎える年であり、災害に備えた日頃からの取り組みを進めることが重要です。さて、現在、長期化したコロナ禍の影響も残る中、物価高騰が重なり、全国的に社会的孤立や生活困窮の課題が深刻化しています。このため各地域では、住民や多様な主体が支え合う地域共生社会の実現やSDGsの目標に向けた包括的な支援体制づくりが求められています。

これらの情勢を踏まえながら、兵庫県社協としても、各市区町村社協に「ほっとかへんネッ

トワーカー」を配置し、連携しながら生活に困窮する人への相談支援と地域のセーフティネットの充実を目標に活動して参ります。

また、市区町域で社会福祉法人が連携して取り組む「ほっとかへんネット」については、県内46の市区町で組織化されました。社会福祉法人のネットワークを生かし、制度の狭間で支援が届かない方、制度はあっても支援に結びつかない方への暮らしを支える多様な取り組みが生まれるよう、引き続き全県的に活動を推進いたします。

最後となりますが、県社協の中期計画「2025年計画」は、令和7年度が計画の最終年度となります。同計画の基本目標「つながりで笑顔輝く共生のまちづくり」を目指し、地域共生社会の実現や大規模災害に備えた協働の取り組みを、市町村協、民生委員・児童委員、社会福祉法人、行政、NPOなどと共に進める所存です。

皆さまのご理解とご協力をお願いして、新年のごあいさつとさせていただきます。

兵庫県社会福祉協議会

役員一同

会長

入江武信

(兵庫県社会福祉協議会 会長)

副会長

田口勝彦

(丹波市社会福祉協議会 会長)

谷村誠

(兵庫県社会福祉法人経営者協議会 会長)

大江秀謙

(兵庫県民生委員児童委員連合会 会長)

玉田敏郎

(神戸市社会福祉協議会 理事長)

常務理事

尾山健司

(兵庫県社会福祉協議会 常務理事)

理事

水田宗人

(西宮市社会福祉協議会 理事長)

萩原絹夫

(小野市社会福祉協議会 会長)

秋山紀史

(神河町社会福祉協議会 会長)

伊藤宣廣

(朝来市社会福祉協議会 会長)

廣地タマヘ

(洲本市社会福祉協議会 会長)

躍動する兵庫へさらなる挑戦

兵庫県知事

齋藤元彦



新年あけましておめでとうございます。

県民の皆様のご負託をいただき、昨年11月より知事として2期目のスタートを切りました。新たな施策や改革に取り組んだ1期目の挑戦を緩めることなく、兵庫の未来を切り拓いていきます。

第1は、若者が輝く兵庫づくり。教育費の負担軽減や教育環境の充実、不登校対策の強化、不妊治療支援の充実など、若者の不安を解消し、一人ひとりが力を発揮できる環境を整えます。

第2は、誰もが活躍できる兵庫づくり。万博を機に、地場産業や農業、芸術文化など県内各地の活動現場へ国内外から多くの人々を誘うひょうごフィールドパビリオンのほか、次世代産業や有機農業の振興など、多様な活躍の場を広げます。

第3は、安全安心に暮らせる兵庫づくり。阪神・淡路大震災から30年の節目を迎える中、震災の経験と教訓を次の世代につなぐ取組を強化します。特殊詐欺被害対策などの暮らし

の安全を守る取組にも力を入れます。戦後80年の節目でもあることから、戦没者を追悼し、戦争体験を継承する取組を進めてまいります。

物価高騰が続き、将来不安が大きい時代だからこそ、子どもや高齢者、障害をお持ちの方、様々な事情で生活に困窮されている方など、支援を必要とされている方々にきめ細やかに寄り添っていくことが大切です。

保育・子育て・介護サービスの充実やケアリバー、ヤングケアラー、ひきこもりなど様々な困難に直面する方への支援強化など、誰ひとり取り残されることのない共生社会の実現に取り組んでまいります。

果敢な挑戦で新しい時代をひらく「躍動する兵庫」の実現には、県民の皆様と力を合わせたオール兵庫での取組が欠かせません。どうぞご理解とご支援をよろしく願います。

大畑 和典

(兵庫県民生委員児童委員連合会 副会長)

坂本 津留代

(神戸市民生委員児童委員協議会 理事長)

伊達 恵一

(兵庫県保育協会 会長)

藤澤 徹

(兵庫県老人福祉事業協会 会長)

松端 信茂

(神戸市社会福祉協議会施設部会 部会員)

西田 勉

(神戸YMCA 常勤理事)

木村 佳史

(兵庫県身体障害者福祉協会 理事長)

多村 孝子

(生活協同組合コープこうべ 常務理事)

服部 洋平

(兵庫県副知事)

小西 康生

(神戸大学 名誉教授)

松端 克文

(武庫川女子大学 教授)

三宅 由佳

(税理士)

監事

松原 一郎

(尼崎市社会福祉協議会 理事長)

中川 裕美子

(兵庫県知的障害者施設協会 副会長)

松山 康二

(公認会計士)

阪神・淡路 大震災から30年

災害ボランティア活動の
歩みとこれから

災害ボランティアが一般化する契機となった阪神・淡路大震災から、今年で30年となります。今回の特集では、ひょうごボランタリープラザの元所長で神戸大学・兵庫県立大学名誉教授の室崎益輝氏と、ボランティア活動の実践に広く携わる被災地NGO協働センター代表の頼政良太氏に、この30年間の災害ボランティア活動の歩みやボランティア活動のこれからについてお話を伺いました。

写真上から

被災地での足湯ボランティア やさしや足湯隊
石川県珠洲市でのボランティア活動 ダリア（宝塚市）
（大規模災害ボランティア応援プロジェクト）

行政、社協、NPOの三者による災害救援ボランティア活動支援関係団体連絡会議
ボランティアによる災害廃棄物の運び出し（ボランティアバス）



災害ボランティア活動 30年の歩み

毎年のように発生する地震、大雨等の自然災害。現在、大規模災害の発生時には、物資を届けたり、土砂を掻き出したり、被災者が一息つける居場所をつくったりと、全国からボランティアが被災地に駆けつけ、さまざまな活動が展開されるようになりました。この災害ボランティア活動は、平成7年の阪神・淡路大震災を機に全国に広がり、同年は「ボランティア元年」と呼ばれるようになりました。阪神・淡路大震災から30年という節目として災害ボランティア活動を振り返るにあたり、神戸大学・兵庫県立大学名誉教授の室崎益輝氏にお話を伺いました。

災害ボランティア活動との出会い

私が災害ボランティア活動と出会ったのは昭和47年9月の京都市を流れる音羽川が氾濫した水害でした。その水害では、友人の実家



室崎 益輝 氏

が泥まみれになったので現場に駆けつけ、泥だし等のボランティアをしました。当時は「ボランティア」という言葉も一般的ではありませんでしたが、地元の学生がたくさん来て支援活動を行っていたことを思い出します。そこには、今で言うボランティア活動の素地が確かにありました。

震災当時のボランティア活動にかけた想い

その後、阪神・淡路大震災が起こり、多くの方々がボランティアとして被災地に駆けつけてくれました。その頃の私は研究者として災害と関わる立場であり、復興や防災に役立てられるよう、震災の記録を残すのが使命だと考え、県内外から「被災者のために」と駆け付けた2000人も学生と共に約50万棟の建物被害の実態調査を行いました。行政による調査ではなく、学生が現地を運びボランティアの立場で遺族や被災者の声を丁寧に聞き取ったからこそ、被災者の協力が得られ、貴重なデータを集めることができたと感じています。

また、被災地の研究者として、「被災者には尽くすけど、自分の為にはやらない」ことを信条に、ボランティアの学生たちに、「この調査で得た知識で論文は書いてはいけない」と指示し、集めたデータは誰でも自由に使えるようにしました。この調査活動を含め、阪神・淡路大震災では多くの方が被災地の復興・復旧のためにさまざまなボランティアな活動をする動きがありました。

「地元主体」で生まれた市民活動

被災地の復興では、市民が主人公となることが重要です。阪神・淡路大震災では現場から「被災者を助けよう」という市民運動やボランティアの動きが自然発生的に生まれました。そして、市民運動が成熟し、NPOやボランティア団体に組織化されて現在も活躍しています。ひょうごボランティアプラザは、これらの組織が協働する場として生まれました。

ボランティアを取り巻く環境の変化

震災から30年が経ち、少子高齢化など社会情勢の変化に伴って、ボランティアの捉え方も大きく変化し、ボランティアに関わるのは特定の人たちに留まっている印象があります。震災当時は「困っている人がいたら助けよう」と自発的に動く人も多かったのですが、震災の経験が無い人にそれをどう伝えるかが難しいところ です。

また、時代の流れとともに、一人一人の生活に余裕がない社会になっていることもボランティア文化が形骸化しつつある一因だと思います。ボランティアとして被災地に向かうには、お金はもちろん時間も必要です。そのため、財政的な支援や社会全体の理解などが重要ですが、例えば、学生がボランティアに行くことを応援している学校は少数にとどまっています。ボランティア部やサークル活動など、積極的に活動している団体もありますが、多くの学校は、授業が最優先となり、ボランティ

ア活動を禁止している学校さえあるのが現状です。

さらに、「コロナ禍では被災地からボランティアには来ないでください」と言われ、心情的にもやもやしていたものが、「行かなくて良い」という理由付けになったこと、体制が十分に整備されず、ボランティアの受け入れに消極的な被災地があることも、ボランティア文化の形骸化に拍車をかけているのかもしれない。

災害ボランティア活動のこれから

災害ボランティアを取り巻く環境は変化してきましたが、災害の頻発化・激甚化、南海トラフ巨大地震の切迫性が高まる中、災害ボランティアへの期待は高まりつつあります。

ボランティアに参加しやすい環境整備といった支援側に関することはもとより、受入体制のあり方や整備の問題も数多くあります。例えば、「災害ボランティアセンターの設置は、全国一律に社協だけに任せて良いのか」「被災地で活躍するボランティア団体などの連携は誰が進めるべきか」「連携を進める上での財源や権限はどうするのか」など、検討すべき課題は数多くあります。

阪神・淡路大震災から30年が経過し、社会全体が「一人一人が助け合おう」という意識を育み、ボランティア文化をどのように作り直すかということが改めて私たちに問われているのです。

ボランティア活動に出会い 関わる人達 〜災害ボランティアと私〜

社会情勢に伴って人々の意識も変化し、ボランティア活動は、以前よりハードルが高いものと感じる人が増えていきました。しかし、その中でもボランティア活動と出会い、実践を重ねている人がいます。

学生時代のボランティア活動を機に、現在も被災地NGO協働センターの代表として、被災地支援に邁進されている頼政良太氏にボランティア活動の魅力を語っていただきました。

きっかけは先輩からの誘い

県外から神戸の大学に入学し、色々なサークルの歓迎会に参加する中で「ご飯おごつてあげる」と誘われたのが、後に所属する「神戸大学学生震災救援隊」でした。入学直前、平成19年の能登半島地震が発生していたこともあり、「仮設住宅で足湯ボランティアをしないか」と誘われ、参加したのがボランティア活動の入口でした。

ボランティアを通して、人に触れる

初回のボランティアでは、家が斜めになっている災害現場に衝撃を受けるばかりでしたが、2回目には現地の方が私の顔を覚えてくれていて、「あなたにまた足湯をやってもらいたい」



頼政 良太 氏

と言ってもらえたことが嬉しく、活動を続ける原動力になりました。何度か参加するうちに、現地の方が足湯に浸かり、仕事のことや家族のことなどを語ってくたさることがあり、「今、自分はこの人の人生に触れている」と感じたのを覚えています。

ボランティアではいろんな人と出会い、人生に触れて、それが自分の成長にもなります。私にとっては面白さ、楽しさがボランティア活動の魅力となっていて、今日まで活動を続けています。

緩く、広く、つながり続けることが大事

ボランティア活動が契機となり、今でもつながるご縁もあります。能登半島での足湯ボランティアをきっかけに、七尾市中島町の集落で、平成21年から地域のお祭りにボランティアとして参加してきました。そのつながりのおかげで、令和6年の能登半島地震では速やかな支援を行うことができました。

元々、地域内での人のつながりが強い七尾市中島町では、発災後、すぐに集落の中で困っている人がいないかの把握をされていました。

その中で、行政機関への「罹災証明書」の申請について、何をすればいいのかわからないとの声がありました。そこで、私たちボランティアは集落の方々と話し合い、集落の方が地域の分の申請書をまとめて行政機関から受け取り、一軒ずつ配布する動きが生まれまし。これは地域のつながりが強いからこそできたものだと思います。

私の経験で実感しているのは、「地域のつながりは防災にもつながる」ということです。中島町の例のように、信頼関係ができていくことで支援にスムーズに入ることができるといふ点もありますし、何より、「切り捨てられる人をつくらない」ことにつながります。防災や災害対策と言つと身構えてしまいますが、平時から緩く自然体でつながっていれば、「誰かがあの人のことを知っている、気に掛けている」ことになり、災害時の支援にもつながります。現在、さまざまな地域でボランティアを続けている人にも、是非、今ある「つながり」を大切にしていきたいです。

「相手のため」は「自分のため」

ボランティア活動を通して得た経験は、今の私の仕事にもつながり、人生の財産になっています。現場には、自分で見聞きして初めてわかることがたくさんあります。

ボランティアと聞くと、相手のための自己犠牲や奉仕活動というイメージを持つ方もいると思いますが、私は助け合いの延長のように感じています。難しく考えすぎずに一度参

加してみてもいいかがでしょうか。私自身、ボランティア活動を続けてこられたのは人との出会いが楽しいし、自分の知らない世界をもっと知りたいという理由からでした。

ボランティア活動は、相手に喜んでもらうと思つてやっていることが、自分の成長につながることもあります。私も活動を始めた当初は、上手くいかないこともありましたが、続けるうちに、現地の方が私の成長を喜んでくれているということがありました。ボランティア活動に興味のある方は、まずは現地に足を運び、やりながら学ぶことが大切だと思います。

ひょうごボランティアプラザの 災害ボランティア活動支援

阪神・淡路大震災以降、市民活動の協働の場として生まれたひょうごボランティアプラザでは、平時から県内の社協やボランティア団体の連携・交流・ネットワーク強化や、県内外の被災地で、ボランティア活動を行うための支援を行っています。

災害救援ボランティア活動支援関係団体連絡会議

災害時において、支援関係機関等がそれぞれの持つ特性・資源・能力を生かした迅速かつ効果的な支援体制を構築できるよう、平時からの意見・情報交換、課題の検討を行い、

相互ネットワークの強化に取り組みます。

大規模災害を想定した災害ボランティア連携訓練

行政、社協、NPO等の三者間での連携した支援活動に向けて、平時からの連携や体制の構築・強化に取り組みます。

災害ボランティア活動に対する助成

ふるさとひょうご寄附金を財源として、県内のグループ・団体が被災地で行う災害ボランティア活動に対して支援します。

●大規模災害ボランティア活動応援プロジェクト

大規模災害時に被災地において災害ボランティア活動を行う5人以上の団体・グループを対象に交通費・宿泊費の一部を助成(上限20万円)

●ひょうご若者被災地応援プロジェクト

ひょうごの若者(15歳以上、35歳未満)が「被災者生活再建支援制度」の適用を受けた被災地において継続的な復興支援を行う活動経費の一部を助成(上限20万円)

ひょうご若者ボランティア隊

若者の力を、県内外の災害発生時に生かすことができるよう、「ひょうご若者ボランティア隊」を設置して、広く隊員を募集しています。ご興味のある方は是非ご登録ください。

各詳細はプラザホームページ

「こらボネットひょうご」をご覧ください。





笑顔輝く

“笑顔”と“共生のまちづくり”につながる取り組みをレポート

共生のまちづくり

「活動を広げる中、みんなが笑顔

岡山県と接する山あいにある佐用町の江川地区。ここでは、高齢化が進む中で住民が自ら「地域デイサービス」を立ち上げ、住民同士が交流し、支え合う活動を進めています。



故郷はみんなで作る 地域デイサービス 「えがお」の取り組み



いきいき百歳体操から生まれた、地域の交流の場所

佐用町江川地区では、「住み慣れた我が家で元気に生き生きと暮らしたい」という願いから、地域自治組織である江川地域づくり協議会が、地域デイサービス「えがお」を立ち上げて活動しています。介護福祉士などの専門職が入浴や食事介助、機能訓練などを提供する介護保険制度のデイサービスと異なり、地域デイサービスは、地域での助け合いを目指して、住民が自ら運営する定期的な通いの場です。

「えがお」の取り組み

元々、地域づくり協議会ではいきいき百歳体操に取り組んでいましたが、参加者からお茶会やゲームなども取り入れてさらに楽しみたいとの声があったことから、地域デイサービス「えがお」として活動の幅を広げ、地域の通いの場・交流の場として定着してきました。代表を務める山口美佐江さんは「活動を広げる中、みんなが笑顔



体操で体を動かし、その後の茶話会もみんなの楽しみです



みんなで集まれば、自然とおしゃべりも弾みます

みんなの力で続ける「えがお」の活動

また、関係者の見守りや協力も「えがお」の活動を支えています。例えば、事業の発足に向けた協議に参画した、町社協の清水さんは「みんなが気軽に集い健康を維持する場所が、今の地域に必要な」という住民の想いの実現に、行政と共にバックアップしただけ」と、地域の住民と話し合いを重ねた当時は振り返ります。

「いつかは誰もが助けられる側になる。だからみんなで助け合う」という信念が、住民主体の活動の原動力です。「地域の人と集い、会話をすることから次の活動につなげたい」と山口さんが語るように、集う人の声を大切にしたい「えがお」の取り組みは続きます。

取材を終えて

「えがお」の活動が、地域のつながりを深めていることが伝わりました。支え合う地域づくりに向けて取り組む他の地域にも、「えがお」の活動は参考になる一つの活動です。

江川地域づくり協議会

事務所：佐用郡佐用町豊福285番地 江川地区文化センター内

地域デイサービス「えがお」の公式YouTube
江川地域づくり協議会のホームページは
こちらから



ホームページ



YouTube

あなたのまちの 福祉活動

共生のまちづくりに
向けて市町社協が
関わるさまざまな
福祉活動を紹介します。



この活動を紹介してくれたのは

加西市社会福祉協議会

☎0790-42-8888

加西市社協

検索



災害への備えから広がる地域づくり

「災害」をテーマにした取り組みは、多くの住民にとって関心が高く、地域のつながりづくりのきっかけにもなり得ます。今回は、加西市社協での取り組みを紹介します。

■ みんなの防災意識を高める活動

加西市社協では、令和3年度から「災害ボランティアセンター設置運営訓練」を実施しており、例年、地域住民、福祉施設の職員や行政等の関係者約100名が参加しています。

この訓練では市社協が策定した災害ボランティアセンターの設置マニュアルに基づき、それぞれの参加者が、センターの運営スタッフや活動に訪れたボランティア、被災した住民などの役割に分かれて、被災地での一日の活動を体験する方法で行われます。活動をより具体的に体験するため、公民館や福祉施設を被災した場所に見立て、実際にその場所に赴いて、泥かきや土のう作りなどの支援を想定した活動を行っています。

体験するボランティア活動の中には掃除などの軽微な活動も含めることで、住民などが訓練に参加しやすくなるように工夫もしています。こうしたことで、大人だけでなく中高生も参加するなど参加者も広がりを見せています。さらには住民などが継続して訓練に参加し、防災への関心が高まることで、他のさまざまな地域活動への参加意欲を高めることにもつながっています。



訓練の参加者に
活動内容を説明する
災害ボランティア加西
らかんのスタッフ

※災害ボランティアセンター
災害時に、支援活動を行うボランティアの受け入れ、被災者とのマッチングなどに対応する機関として、一般に被災地の市区町社協に設置されます

■ 「振り返り」もセットにしなが 訓練を継続

訓練は、当日の運営だけでなく、企画・準備段階から地元のNPO法人「災害ボランティア加西らかん」と市社協が協力して実施しています。「らかん」の豊富な災害ボランティアとしての活動経験を生かすことで、訓練はより充実したものになっています。

この訓練では、特に「振り返り」が重要な時間になっています。訓練当日は、参加者が感想を述べあう時間を設け、訓練を通じて感じたことや気づきを共有するよう働きかけています。また、社協職員にアンケートを実施し、訓練の反省点を洗い出します。こうして見えた課題をもとに社協と「らかん」とで振り返りの機会を設け、年数を経て訓練の充実を図ってきました。

これらの積み重ねの結果、この訓練は地域のさまざまな人が関わる活動として軌道に乗ってきました。訓練に参加した民生委員・児童委員が「らかん」とともに能登半島地震の被災地へ支援活動に出向くなど、新たな展開も生まれています。

災害は、多くの住民が関心を寄せるテーマであり、多くの参加や協力が得やすいものです。災害時の支援活動への備えと日々の地域活動の充実を目指して、これからも加西での取り組みは続きます。



中高生も参加しており、
「防災への関心が
より高まった」などの
声も寄せられます

キラリ★社会福祉法人



地域を歩きながら
公園にいる子どもたちの
様子を確認する
実務者会議のメンバーたち

芦屋市社会福祉法人連絡協議会 (ほっとかへんネットあしや)

子どもを孤立から守る第一歩「ほっと屋」の取り組み

令和3年度に設立された芦屋市社会福祉法人連絡協議会（以下、ほっとかへんネットあしや）は、市内の21法人が共に活動しています。今回は実務者会が中心となって始めた、子どもの居場所づくりを紹介します。

地域の子どもたちを 孤立させないために

令和5年度に入り、「ほっとかへんネットあしや」では、地域で孤立感を抱える子どもたちへの支援を活動の目的とすることに決めました。

活動の第一歩として、実際に地域に出て、子どもたちのことを知ることから始めようと、「夜の芦屋ウォーキングイベント」を実施。実務者会メンバー約20名が、子どもたちの放課後、市内の公園や児童施設を巡り、地域と子どもたちの様子を観察しました。公園で遊ぶ子どもたちの姿を見かける一方、「共働き家庭が増え、公園に出てこられない子どもたちがいるのでは」と、外で遊べない子どもがいることに思いをはせる声も挙がりました。

子どもの居場所づくりへの挑戦 連携で実現した「ほっと屋」

ウォーキングイベントの後、実務者会議では、子どもたちと接点を持つことを第一目標とし、親子で参加できるイベントを実施することにしました。

引きこもりの子どもたちへの慎重な対応や、孤立している子ども

たちが集まりに参加できるかなど、実施上の課題も議論されつつ、6回の実務者会を経て、子どもの居場所「ほっと屋」が企画されました。

ほっとかへんネットに企画する法人の職員たちは、子どもたちに遊びを通して楽しんでもらおうと知恵を出し合いながら準備を進めました。そうして迎えた当日、「ほっと屋」には、幼稚園児、小学生、付き添いの保護者、総勢15名が参加。子どもたちは、職員たちと「だるま落とし」などのゲームを楽しんで交流しました。

実務者会のリーダーを務める明倫福祉会の土肥拓路さんは、「企画を成功させたことは大きな一歩。『ほっとかへん』を合い言葉に法人職員が協力して、望まない孤立を解消するという目的に向かって前進できた気がする」と振り返ります。また、「ほっと屋のような居場所づくりを続けることが、地域をつなぐ重要な要素になる」と語ります。

今後は、子どもが喜びそうなレーディングカードを製作し、施設や園に来た子どもたちに配付する計画や、居場所に集まった子どもたちが抱える不安や悩みを受け止めることも視野に入れて活動を

進めます。

ほっとかへんネットあしやの取り組みは一步を踏み出したばかりですが、その分、新たな協働や活動が生まれる可能性を秘めています。子どもたちを孤立から守るという目的に向けた活動から、今後とも目が離せません。



「ほっと屋」に集い、だるま落としゲームを楽しむ子どもたち



保護者や子どもたちへ周知を図った「ほっと屋」のチラシ

ほっとかへんネットあしや
事務局・芦屋市社会福祉協議会
TEL: 0797-3217525

社会福祉政策の充実に向けて
社会福祉情勢セミナーを開催

11月27日、兵庫県社協社会福祉政策委員会は、社会福祉法人や社協、福祉関係団体の役員76名の参加を得て、「令和6年度社会福祉情勢セミナー」を開催しました。

今回は、地域福祉計画の策定や包括的な支援体制づくりが進む「地域福祉の政策化」の時代に、社会福祉法人や社協など福祉関係者に求められる連携・協働による地域づくりを考えることをテーマに開催しました。

講師には武庫川女子大学心理・社会福祉学部教授の松端克文氏を迎え、「地域福祉の政策化の時代における社会福祉法人・社協の役割」と題する講演をいただきました。講演では、社会福祉法に位置付けられた包括的な支援体制の整備の「地域づくり」において、専門職による支援に加え、住民参加による困りごとを抱える人への支援にも頼る構造になっているものの、人口減少や単身化等の進行を背景に、地域社会のあり様が変わってきていることを考慮する必要があるとの指摘がされました。また、

さまざまな政策や事業が実施される一方、実際の生活課題にどれだけ対応できているのか、その効果に着目する必要があるという課題提起がされました。

今後、地域福祉を進める上では、個々の関心事でつながる機会づくりや、多様な住民が共存できる地域づくりを目指す必要があり、まずは身近な地域で集い、交流し、話し合う場づくりを、専門職が積極的に関与しながら各地域で進めていく重要性が強調されました。

今回のセミナーで得た気づきを生かし、県社協では本委員会の会員と共に政策提言の充実に向けた取り組みを継続していきます。



松端教授からは、地域福祉を取り巻く実情や求められる取り組みについて提起がありました

人材確保にSNSの活用を
福祉人材確保・
定着力向上研修を開催

12月17日、県社協では、福祉人材の確保や法人のPRに向けて、若者に普及しているインスタグラムやTikTokなどのSNSの活用について学ぶ、「福祉人材確保・定着力向上研修」を開催。県内の社会福祉法人等の人事・採用担当者105名が参加しました。

冒頭、介護福祉士の養成校である姫路福祉保育専門学校介護福祉学科長の鳥羽氏からは、学生の就職活動の傾向について、「人間関係の良さを重視し、実習などで雰囲気を知ってから応募することが多い」と、職員間連携やコミュニケーションを重視している実情をお話いただきました。

続く講義では、「SNS・ショート動画の活用術」と題し、SNS運用やコンテンツ作成を行うセントラルビレッジ合同会社の田中氏とインフルエンサーのばてにゃんこと星野氏が登壇し、各SNSの特徴の比較やターゲットに合わせた使い分けの工夫など、実体験をもとに紹介いただきました。

SNSを採用活動に活用する際、法人のアカウントをまず知ってもらう潜在層にアプローチし、次に興味を持った方に仕事先として意識いただく情報を伝えるという段階的な戦略の必要性が強調されました。

研修の最後には、参加者間の情報交換を実施。「利用者を映す場合の同意書の扱い」「組織内のルール作り」などより良いSNS運用に向けた意見が飛び交いました。県社協では、今後も各法人の人材確保を支えるため、情報発信や採用担当者間の交流もできる研修を開催していきます。



講義では、各SNSの特徴・ターゲットを把握し、使い分けられることもポイントになることが共有されました

新年福祉のつどい

1月11日、神戸市のホテルにおいて、「令和7年新年福祉のつどい」が開催され、市町社協、社会福祉施設、民生委員・児童委員、関係団体などの福祉関係者約230名が一堂に会しました。

主催者である入江武信県社協会長からの開会挨拶に続いて、来賓を代表して齋藤元彦県知事、浜田知昭県議会議長の両名からの挨拶があり、誰もが安全安心に暮らせる兵庫づくりや共生社会の実現に向けたメッセージが寄せられました。

つどいの参加者は歓談をしながら交流を深め、新年にあたって相互の連携や協働を図り、共に地域福祉の推進を誓い合う機会となりました。



新たな一年に向けて、齋藤元彦県知事より挨拶

寄付・寄贈のお礼

県社協では、寄付や寄贈を、地域福祉の向上に役立てています。今号では、令和6年11月以降に善意をお寄せいただいた企業・団体をご紹介します。

温かな善意に対し、感謝申し上げます。

- いなみ野祭実行委員会様より県社協へ浄財の寄付
- 一般財団法人近畿陸運協会様より県社協へ浄財の寄付
- 一般社団法人生命保険協会兵庫県協会様より県内市町社協へ福祉巡回車、車いすの寄贈
- 株式会社ツルハホールディングス様、クラシエ株式会社様より県内市町社協へ車いすの寄贈
- 一般社団法人日本自動車販売協会連合会兵庫県支部中古車フェア様より県社協へ浄財の寄付
- 関西遊技機商業協同組合様より県内市町社協へ車いすの寄贈



一般社団法人生命保険協会兵庫県協会様からの車両、車いす贈呈にかかる寄贈式

福祉の就職総合フェアのご案内

福祉人材センターでは、「福祉の就職総合フェア」を、3月15日に神戸国際展示場2号館で開催します。100を超える法人が出席の福祉施設・事業所ブースで面談ができるほか、福祉職場への就職・資格にかかる相談コーナー、介護ロボット体験コーナーを設置します。また、併設イベントとして「学生と福祉現場の若手職員との交流イベント」を実施します。

詳細は福祉の就職総合フェアの特設サイトをご覧ください。



人生が楽しく仕事が
きっと見つかる。

兵庫県下最大級
130法人(予定)が参加!

兵庫
福祉の就職
総合フェア
in Hyogo

令和7年3月15日(土) 13:00-16:30
(入場は16:00より)

会場 | 神戸国際展示場 2号館

参加費
無料

入退場
自由

履歴書
不要

無資格・
未経験OK

個別面談

- 福祉施設等の採用担当者との個別面談
- 福祉現場への就職や資格に関する各種相談コーナー etc.
- 雇用保険に係る「就職活動実績」の証明も発行します

Present 福祉の仕事をわかりやすく
ガイドブック 就職活動に役立つ
素敵なグッズ

無料! 介護ロボット体験もできます!

学生と若手職員との交流イベント

「福祉の仕事の
きこえを聞いてみよう!」

イベントの詳細はフェアの
特設サイトをご覧ください!

時間 14:00~15:30
対象 高校生、大学生、
大學生、専門学校生

社会福祉法人 兵庫県福祉協議会
〒650-0002 神戸市中央区北長狭2-1-1
兵庫福祉センター

お問い合わせ ☎078-271-3881

※主催 | 兵庫県社会福祉協議会、兵庫県 [共催] 全国社会福祉協議会 [後援] 厚生労働省、兵庫労働局 [協賛] 神戸公共職業安定所(ハローワーク神戸)
[協力] 兵庫県社会福祉法人経営者協議会、兵庫県社会福祉法人経営者協議会青年協議会、ひょうご分庁テクノロジー導入・生産性向上支援センター

就職総合フェア チラシ

就職総合フェアの特設サイトはこちら ▶